新刊紹介

王朝時代皇室史の研究

竹島寛著

近時國體觀念に對する自覺が、とみに旺盛となり、その明徵の聲、上下共に呼ばれるの際、我が國體の中樞たる皇室に關する研究は、唯に學問上のみならず、明確なる國體觀念の培養に益する所少からざるものがあらう。本書の如きも、斯かる點に於て意義を認められるであらう。だからと云つて、本書は單に時勢の流に乘じて現れたものではなく、故著者の人物なり學問などについては、既に本書に記された著者の略年譜や、上田萬年博士の序文によりて明かなる如く、その學究的態度も又顯彰さる可きであらう。

その內容は、主として王朝時代の皇室に關して研究されたもので、最初に「王朝時代皇室史總論」と題して四項に分けて、一、天皇の統治權、皇位の繼承、天皇の御名及び御諡號、三種の神器について。二、后妃に關して其の御稱號、御資格、御待遇等について。三、上皇皇太后大皇太后及び女院について。四、親王及び諸王について述べ、皇室史の概說を試みてゐるが、本書に於ける研究の中心は、現今の皇族にあたる御方卽ち皇親（親王及諸王）に關する事項である。このことは、從來餘り研究されてゐないかと思ふ。特に、其の御員數、經濟狀態、政治的地位等については細述されてゐる。例へば、其の御員數に於ては、大體に平安朝初期、桓武天皇より淸和天皇、陽成天皇の御代までは親王御四十方。中期、光孝天皇、宇多天皇の御代より村上天皇、冷泉天皇の御代までは御三十方餘。圓融天皇、花山天皇の御代以後、御二十方位御在世され、諸王の御員數は明白ではないが、大體平安朝初期に於て、在京諸王の御員數五百方に近く、末期に於ては少かつたと述べてゐる。其の經濟狀態については、親王にあつては、一、御封祿より來たる收入。二、年給より來たる收入、三、雜收入（主として公家よりの賜物、遺財處分、外戚支給等）が主なる收入であつたが、封祿制度は、平安初期より漸く行はれなくなり、中期後は年官年爵が御封祿となつた。而して之を三期に區別すれば、第一期（奈良朝）は御封祿主要時代、第二期（自桓武天皇至醍醐天皇）は御封祿、雜收入、相半ばする時代、第三期（朱雀天皇以降）は御雜收入主要時代、御封祿最少時代となる。に是反して諸王の經濟的事情は、餘りめぐまれてゐなかつた。次に、其の政治的地位に就いても、藤原氏の勢力が盛なるにつれて、親王の經濟的狀態が次第に雜收入主要時代となつたと同樣に、皇親に於ても次第に政界に入られることなく、二世三世の諸王に至つては、諸臣と同じく、藤原氏の力によつて立身出

世をはかるか、さもなくば地方に去つて廣大なる領地を營んで、地方豪族となるかの何れかで、多くは新天地を求めて地方に土着するやうになつた。而して此の事實は、後に武家の勃興と關聯して興味ある問題であらう。其の外「皇親と文藝」とを考察し、政治方面とは反對に、文藝上に於ては遙かに藤原氏を凌駕したと述べ、或は「皇族御制度史」を叙するなど、實に經濟的法制的政治的藝術的に、多方面より研究されてゐることは注意すべきであらう。

尙、本書には外篇として「奈良朝の物價に就いて」、「王朝時代に於ける貸借上の利息に就いて」、「正史上より觀たる國道變遷の原因」、「元興寺考」、「大安寺の平城京遷徙に就いて」、「古寺院の僧坊及び雜舍」、「寺院の血統相續と師資相續」の如き、興味ある論文を收めてあるが、これらは皇室史とは直接的な關係はないやうに思はれるが、遺稿集としては收錄せざるべからざるものであつたらう。是を以てしても、故渚者の學風がうかがはれると思ふ。

（昭和十一年三月二十七日發行、發行所東京市古文書院、洋菊五一六頁、定價參圓五拾錢）　（宮田）

薩藩の文化 附薩藩沿革地圖

幕末明治維新にかけての薩藩の動きは、我國史上如何なる位置をもつたかは、今更言を多く須ひなくてもよい。唯に政治上の役割のみならず、其の文化的方面の所産も、又顧みる可き多くのものがあつた。由來德川時代は、封建制度の社會であつたことは、說かれてゐるが、その性質は複雜なものである。大體に云へば、其の裡に資本主義的社會を形成すべき要素がはぐくまれてゐたのである。例へば、貨幣の流通、鑛山業、貿易、交通等、商工業の發展があり、又學問に於ても、實證主義的科學的精神を含めるものなど、次第に發達してゐた。之は要するに、文化發展の一過程ではあらうが、德川時代封建制度とは相矛盾するものである。之が又、德川時代文化の近世的意義でもあらう。本書は、斯かる意味に於て通讀すれば、其の間參考となる可きものがあると云へよう。

元來本書は、昨秋の陸軍特別大演習に際して、天覽に供し奉り、その光榮を記念せんがために編纂したもので、研究的性質をもつた著書とは云ひかねるが、其の內容は、第一、宋學、第二、兵事、第三、藥園と本草學、第四、洋式造船並科學的事業、第五、紡績事業と分けてある。何れも、薩藩文化の性質を物語るべきものである。薩藩の文化を知るに良參考書たり得るであらう。（洋菊三一九頁。鹿兒島市敎育會發行）

尙、本書と同時に「薩藩沿革地圖」をも編收したのであるが、その收められてゐるものは、島津氏入國以來の古繪圖より、天保年間に至る迄である。卽ち次の如くである。

一、島津氏入國以來の古繪圖
二、三州割據圖
第一、大永六年地圖、第二、天文四年地圖、第三、天文十二年地圖、第四、天文十九年地圖、第五、永祿十年地圖、第六、

天正元年宗圖、第七、天正十四年地圖、第八、九州略定地圖、第九、天正十四年九州臣服圖、第十、文祿四年地圖

三、鹿兒島繪圖(文政前後)

第一、新橋ヨリ立馬場通鞦韆冬冬磯迄、第二、立馬場通ヨリ廻、冷水、城ヶ谷、妙谷寺草牟田迄、第三、吉野橋ヨリ下川內池之平迄、第四、武橋高麗町橋ヨリ武三尾崎錦崎御屋敷芝立松迄、第五、西田橋新上橋櫨木馬場ヨリ常盤壽國寺迄。

四、天保十四年城下繪圖

以上十七圖であるが、何れも原本より縮寫し、「古繪圖」の外は悉く原色版とし「三州割據」は原本と同大である由である。何れにしても、薩藩の變遷を知る上に於て、重要な資料たるべきであらう。(發行所、鹿兒島市敎育會)　(宮田)

薩藩女性史

本書は、昭和十年八月、鹿兒島市に於て、文學士中村德五郎氏が講演した稿文を、剞劂したものである。其の目的は、國史上に於ける女性の役割を現さんとしたもので、特に薩藩が天下に率先して、王政復古明治維新の大業を翼贊した裏面に潛んでゐた、薩藩女性の美德を顯彰せんが爲であると述べてゐる。今の其內容を示せば次の如くである。

一、天照大神。二、木花開耶姫。三、豐玉姫。四、玉依姫。五、吾平津姫。六、御刀媛。七、諸縣君泉媛。八、髮長媛。九、丹後局。十、梅窓夫人。十一、賢章院殿。十二、天璋院殿。十三、山田歌子刀自。十四、稅所敦子刀自。十五、乃木靜子夫人。十六、孝女義婢節婦。

(別錄)一、お南の方。二、種子島久時公生母黑木氏。三、山田昌巖母堂町田氏。四、松壽院夫人。五、肝付兵部母堂ため子刀自。六、西鄕政子刀自。七、大久保福子刀自。八、有村蓮子刀自。九、松方袈裟子刀自。十、東鄕益子刀自。(附錄)一、薩藩の文敎。二、薩藩の士風。(鹿兒島市敎育會發行、菊版四一四頁)　(宮田)

願證寺誌

佐々木芳雄著

蓮如上人の出現によつて眞宗敎團が、一大飛躍を遂げたことは事實である。近畿、北陸、東海の諸敎團は何れも、其の後裔の護持せられたところである。此の願證寺も又その一で、蓮淳の草創にかかり、東海敎團の中樞となつてゐた。彼の長島一揆は、眞宗史上のみならず、我が國史上に於ても、問題とすべき現象である。而して、此の長島地方の門徒の中心となつてゐたのは、實に願證寺であつた。從來、此の地方に於ける、敎團の發展についての研究は、其の良書を認められないが、本寺誌の出現によつて、其の全貌が明かに知られるであらう。著者佐々木芳雄氏は、其の著「蓮如上人傳の研究」によりて、既に眞宗史家としての名聲を示してゐるのであるが、而も願證寺は氏の住職たる

の關係より、本寺誌編輯には最も適してをり、それだけに內容に於ても、又信賴を以て讀めるものと思ふ。本書は、その創立から現時に至るまでの寺史を細述されてあるが、次に、その內容項目を記して紹介にかへよう。

第一章　序　說

一、寺地の沿革、二、願證寺々緣の梗概。

第二章　願證寺の開創と長島敎團の膨脹

一、長島門徒の起源、二、願證寺の開創と蓮淳、三、實悳願證寺を繼ぐ、四、證悳、五、長島門徒の膨脹、六、證悳長島城に據る。

第三章　長島一揆

一、一揆の濫觴、二、證意、二、長島の防備と諸豪の割據、四、永祿の攻略、五、元龜年間の來攻、六、天正の籠城。

第四章　桑名願證寺の興廢

一、戰亂後の長島敎界、二、淸洲桑名兩所の願證寺、三、准悳と准意、四、寂悳と琢誓、五、琢誓の改派事件の顚末、六、桑名願證寺の廢退と通寺の勃興。

第五章　長島御坊願證寺と誓來寺

一、又木坊舍の創草と留守居誓來寺、二、誓來寺性玄と說誠、三、誓來寺號廢止と兼帶所願證寺、四、兼帶所の廢止と願證寺、五、明如宗主の巡敎、六、敎勢の一班。

附載、願證寺略年譜。

（昭和十一年三月三十日發行、發行所願證寺文庫、非賣品、四六版二三一頁）　（宮田）

淨土宗全書　第廿二卷「索引」

淨土宗典刊行會

淨土宗全書廿卷が、淨土敎研究者にとつて、座右に備へ、一日と雖も不可缺であることは、喋々を要しないことである。と同時に、全書所收の尨大過ぎる內容に汎つては、藉すに多大の時日を以てせねば、自己の限られたる研究にのみ於ても、覺え書を擠へる丈けに、不寡る努力が要せられる。特に初學者にとつて、此の惱みは深いものがある。

豫ねて、淨全廿卷に對する索引の出來ることを聞き、洵に一日千秋の文字通りの待望であつた。而して、いま淨全第廿二卷として刊行されたことは、實に吾人に無上の喜悅と、それが編輯分類にあたられし諸師に滿腔の敬意とを、思はしむるに切なるものである。

內容は（一）人名（二）地名（三）寺名（四）書名（五）術語（六）論目（七）法數（八）成句（九）雜（動植物、器具その他）の九分類となし、五十音順に據つて、卷數と頁を採錄し、總頁六九四頁、一頁は三段組（セクション）となつてゐる。

斯學界の索引として手離されぬ便宜の書の一本として、茲に紹介といふより謝意を表しておきたい。　（自見）

佛教學論叢　第一輯

明照佛教學研究會

佛教專門學校内、明照學會の研究發表機關誌として、誕生せるものが本誌である。今後、年一回宛發行の由、その門出として本誌の多幸を祈る。左に論文題目と執筆者を載せておきたい。

因の相違決定から觀て喩支の效力價値を疑ふ……林　彦明
法然教の本質と宗學の本領……前田聽瑞
六朝時代に於ける佛僧の往來せし西域交通路とその記錄……嵐　瑞澂
方便心論と正理經論とに現はれたる論理思想の比較　飯田順雄
善導大師の著書撰述の前後に就て……岸　覺勇
原始佛教々團に於ける戒律の地位……梶原重道
德川家康の淨土教信仰……三田全信
轉識賴耶因緣に就て……田中順照
大毘婆娑論に於ける諸部派教義概觀……宅見春雄
立道上人と其の選擇集研究……千葉良導
支那佛教史上に於ける烏仗那國……岩井諦亮
鎌倉時代人の觀たる淨土教……横井光哲
東大寺圖書館藏極樂遊意解說……惠谷隆戒
平安末期古寫本極樂遊意解說……坪井俊映
金澤文庫册子本目錄解說……佐藤密雄
聖諦分別論—分別論註、離惑論和譯……（自）

眞宗十講

純學的なる研究書の述作が至難であるとゝもに、大衆性に富める啓蒙書の執筆も、其の内容を如何に讀者をして理解せしめるか、といふ點に於いて容易ではない。殊に、眞宗教義を組織的に一般大衆へ紹介し、之を徹底せしめることは、眞に其の成果を考へる場合、單なる宗學上の研究書よりも、異つた立場に於いて、難關であらう。本書は卽ち斯かる使命を負ふて、刊行せられしもので、其の序文にも「本書の内容は眞宗概說で、普通教育の知識社會層に眞宗一般を紹介するのが發行の趣旨である」と舒べられてゐる。今、其の内容を示せば、總說（山崎精華）（1）教相判釋（眞木智英）（2）所依經典（德澤龍泉）（3）信仰對象（神子上惠龍）（4）指方立相（瓜生津隆雄）（5）衆生性論（桐溪順忍）（6）他力廻向（善賢大圓）（7）信因稱報（加藤佛眼）（8）平生業成（梁瀨亮貞）（9）往生成佛（篠田龍雄）（10）眞俗二諦（加藤哲勝）である。かゝる多數の、西派の新進學徒によつて分擔、執筆せられてゐるが、中には未だ專門的臭味を脫し得ないところもあるやうに思はれ、又、執筆者が餘り多數の爲め、一貫して統一を闕いだ憾がないであらうか。然るに大體、如上の趣旨にふさはしく出來てゐることはいひ得よう。本書は、西派の佛教中央學院出版部の企圖にかゝるものであるが、將來、更に此の種のよりよき著述の生れんことを切望して止まない。（四六版、定價一・五〇）（K生）

Arthur C. March, A Buddhist Bibliography. The Buddhist Lodge, London, 1935.

宗教の多方面に渉る研究が、益〻廣くなり深くなつた近頃では、その研究著書も非常に多くなつた。それで、この複雜性を何とか指導して一目瞭然たらしめることが必要である。著書目錄とか、著書解題と云ふものは、かう云ふ要求に對へて作られるものだが、この Buddhist Bibliography もその一つである。目錄があれば、つまらぬ勞力や時間の浪費がなくて重寶である。

西洋の佛教研究の著書に關する、纒つた著書目錄としては、これまでに、Hans Ludwig Held 氏の、"Deutsche Bibliographie des Bupdhismus" 及び Jean Przyluski 氏の鑑修せられた、"Bibliographie Bouddhique" 等がある。"Deutsche Bibliographie des Buddhismus" は、ドイツ語で書かれた、書物及び雜誌中の論文の目錄であり、既に絕版になつてゐるから、一九一六年以降の書物に就ては、目錄が存じない。"Bibliographie Bouddhique" は、毎年一回宛發行せられ、すぐれた著書目錄で、フランス語で書いた書物に限らず、英語やドイツ語で書いた書物をも含めて、凡ゆる言葉で書いた書物を、目錄にしてゐる點と、著名な書物については、簡潔な內容紹介を與へてゐる點とで、讀者を稗益するところが多い。しかし、殘念なことには、一九二八年以前の研究著書がこの目錄には含まれてない、これが惜しい。そこで、この補充に、毎年の增補目錄には、或る特殊な著者に就いて、その著書目錄を加へてゐる。M. Léon Feer, Ph. Vogel, Paul Pelliot 等の著書目錄はそれである。かう云ふ具合にして、"Bibliographie Bouddhique" は、ほゞ完全に近い目錄になつてくる。しかし、これらの目錄は、ドイツ語或ひはフランス語で書かれてゐるので、英語で書いたこの種の目錄もあつてよいと思ふ。かう云ふ理由から本書が編纂されたとも考へられる。

本書は、英語で書いた佛教關係の書物、及び雜誌論文を集錄して、雜誌論文目錄と、著書目錄との二部から成り立つてゐる。索引の方法に就いては、著者名から引けるようになつてゐるが、別に Subject Index を附してゐるのが便利である。また、大ていの書物には、發行當時の定價を附記して、其の上古本のあるものには、近頃の標準値段をも併記すると云ふ親切さである。それから、大英博物館の Press Mark をも入れてゐる。全體で二五七頁、size も 8vo であるから、取扱ひに便利である。著者名を太文字にするなどして、使用者の便宜を考へてゐる編纂者の苦心がうかゞはれる。尙ほ、本書には者那教に關する研究著書も集錄されてゐる。毎年、增補目錄を發行して、これによつて本書を最も新しい目錄にしようと著者は言つてゐられる。恐らく、他にかう云ふ種類の佛教著書目錄は發行せられないだらうから、本書が英語の佛教著書目錄の標準になるように

と、編纂者は希望してゐられるのである。

目錄を作る仕事は、勞力のかゝることである。著者は五年前から、この仕事を始めて、昨年一まづこれを完了せられたようである。集錄に當つて、誤謬や脫漏もあらうから、その點の訂正を著者は求めてゐる。博雅の士の御示敎を望む次第である。佛敎研究に從事せられる諸士に、敢て本書を座右に備へられるのをお薦めして、編纂者の勞を多としつゝ紹介を終る。（新田）

（8vo, cloth, 21s.）

滿洲金石志稿　第一冊

園田一龜編

滿鐵資料課によつて發行せられたもの、滿鐵調査資料第一六九編である。

古來滿洲の地には幾多の民族が興亡した。古くは肅愼、夫餘より高句麗、渤海、遼、金、元、淸等々、或は此の地より起つて大帝國を建設し、或は此の地に大範圍を領有した。此等の民族國家の推移を逆るには、大略支那側の史料と朝鮮側の史料に據らねばならぬ。

今迄主として滿鐵の後援の下に滿鮮或は滿蒙の歷史文化は相當に調査研究されて來たのであるが、なほ幾多の疑問と未開拓の領野が滿洲史の中には殘されてゐる。而して今や新興滿洲國の發展に伴ひ、滿洲史は新なる興味と注意を惹くに至つてゐる。

然るに、滿洲史關係の文獻は必ずしも多いとは云へない。滿蒙學徒にとつて十二分の史料が提供されてゐるものではない。正史中の斷片的記載は不充分である。こゝに傍證史料の必要を痛感する。だが不幸にして滿洲には古文書古記錄と云ふ如き文獻が存しない。そこで滿洲史研究には在來の文獻を別にすれば滿洲各代の金石文が重要なる地位を占むることゝなる。その史料的價値は決して僅少ではない。かくて、最近學徒の眼は滿洲各地に殘存する碑文に向けられて、契丹文字碑文の發見、大金得勝陀頌碑の發見となつたものである。而してこゝに在來既知の滿洲碑と近時發見のそれとを總べて網羅し集大成されて滿洲金石志稿の發刊を見たのであるが、其の學界に益すること顯著なるを覺ゆる。書中、全部で九十七の金石文が蒐錄されてゐる。

時代別にして高句麗及渤海時代—五、遼時代—三三、金時代—二三、元時代—三六である。地方別にして奉天省—一一、安東省—三、吉林省—四、濱江省—二、錦州省—四四、熱河省—二三、興安西省—七、關東州—三である。各文に簡單なる略解が試みられ、關係文獻の揭載されてゐることは、研究者に便利を與へること大なるものである。なほ注意すべきことは、此等金石文の內、佛敎關係のものが多數を占めてゐることである。元來滿洲地方の過去の佛敎傳流狀態を記す文獻は極めて僅少なもので、且斷片的なものにすぎない。故に滿洲佛敎史研究に於て、此等金石文が重要な意義を有すること一般史の場合に劣らない。

筆者は滿洲地方に興亡した東北諸民族と佛敎との關係を極め

て濃厚なるものと思ふものである。

身の危險を冒して交通不便なる滿洲の奥地に、貴重な碑文を蒐集された編者園田一龜氏の努力に感謝の意を表する。卷首に寫眞二十數葉があるが、やゝ鮮明を缺くのは惜しい。なほ元代以後のものも早く蒐集出版されんことを望む。（四六倍版約二二〇頁昭和十一年四月二十日發行）　（野上）

景教の研究

佐伯好郎著

景教とは基督教の一派ネストリウス派（Nestorian）の支那名である。景教が東洋學者の注意を惹くに至つたのは、摩尼教、祆教とゝもに外來宗教の一として、此が極めて國際的であつた唐代支那に行はれたことゝ、西方文化東漸の一例證たるが爲めであらう。

さて景教は、明の天啓年間、漢文とシリヤ文字とよりなる彼の有名なる大秦景教流行中國碑が陝西、西安府に於て發見されてより、殊に識者の注意を招き、しかもその研究は主として泰西耶蘇教宣教師によつて着手された。我國に於ては故桑原博士の同碑文に關する卓説、羽田博士の二、三にとゞまらない明快なる研究がある。特に數年前同博士の手により東方文化學院京都研究所より發行された影印版「一神論異三序聽迷詩所經一卷」等は燉煌出土の珍貴なる漢譯景教經典の一部である。此等は特殊研究にして、景教の總合的研究の成果の發表されたのは本書を以て初めとする。序によれば著者は既に早く明治三十七年より景教研究に志し、昭和六年より東方文化學院東京研究所に於て更に精進し、こゝにその成果を發表されたものである。四六倍版一二〇〇頁の巨著、内本文上下兩篇一〇〇〇頁、附錄二〇〇頁挿入圖一八八、圖版一七地圖九、及び表・索引が附してある。本文目次左の如し。上篇、一緒論、二景教の意義、三初代基督教とその環境、四東西兩教會の神學とその教會觀の概略、五基督教の根本思想の概略、六基督教會の組織に關する根本觀念とその變遷、七基督教會の固守する聖なる典禮の種類、八基督論とその變遷、九基督に於ける人性意思に關する一説、一〇基督の本質に關する論爭と景教、一一景教思想の源流、一二景教の異端性の問題、一三景教の信仰箇條及びその教理、一四マルチンルーテルの景教觀、一五景教變遷史、一六景教分布地誌、一七景教文獻總論、下篇、一景教の支那傳來、二支那景教の文獻資料三支那本部並に塞外に於て發見せられたるシリヤ語其他の外國語の景教文獻の概説、四支那の内外に於て發見せられたる景教遺物、五結論。著者の研究は既に學界に發表されたる東西學者の研究成果を集大成し、以て景教及びその發展を史的に究明し、更に著者自らの幾多の新研究をその中に編み込まれたものである。内容の詳細なる紹介は避けるが著者は結論として、景教が何故に支那に於て發展し得なかつたかの問題を論じてゐる。これには凡そ内的原因と外的原因とがある。儒、道、佛三教の思

想によつて閉ぢられてゐた支那の社會の上下を動かすだけの力を景教自體所有してゐなかつたことは前者であり、支那景教々會が本國からの支持を得なかつたこと、支那人より優秀なる景教僧侶の出ざりしこと、從つて支那に於て景教神學が樹立されなかつたこと等は後者卽ち外的原因であると。絕大なる著者の努力に敬意を表する。（東方文化學院東京研究所發行（價拾五圓）

（野上）

國寶毛詩正義（乾帙）

東方文化學院發行

本書は東方文化叢書第八として全三十三卷の內、二十四卷を九册に分ち乾帙として影印發行せられたるものなり。此原本は故內藤湖南博士遺愛にして、其哲嗣乾吉氏の珍藏するところ、今全書四十卷の內第一卷より卷七に至る七卷を佚し、三十三卷を存す。此書は先に島田翰によつて古文舊書考に著錄せられ、其の天壤間の孤本なる事は周知の如し。原本には第四十卷の尾に淳化三年壬辰四月進書の官銜名李沆等四人十一行の校勘の記、及紹興九年九月十五日紹興府雕造の四行の刊記あり。（見古文舊書考卷二）每半葉十五行、每行二十五六字、白口左右雙闌、板心の下方に刊工の姓名を記す。所謂單疏本にして、其經注の起止を標せる文と、正義とを一格を空しくして連書せるは唐代以來の古體を存するものにして、世に通行の注疏本と異る。原本卷初第一卷より第七卷に至るまでを佚する外、卷十二の第二十一葉、卷十五の末、第三十二葉以下、卷三十二の第三十五葉、卷三十七の第四、五の兩葉を闕く。每卷卷首に金澤文庫、香山常住の墨印並に井々居士珍賞子孫永保の朱印あり、由つて本書流傳の跡を知るべく、卽ち金澤文庫より流出し、後、周防の古刹より井上伯の手に歸し、次に竹添光鴻の儲藏となりしもの、此外宋本、天壤間孤本、寶詩篋の印記あり、此卽ち湖南博士の親しく鈐するところたり。今や十三經の筆疏本悉く傳はらず、前に吾國に於て尙書正義古鈔禮記正義殘本の覆印あり、更に東方文化學院又宋槧禮記正義殘本、鈔本春秋正義を影印して弘く士林に餽饋せらる、今又此祕寶を公にせられ、吾人親しく珍籍を机上に展觀し得るは誠に學子の幸福にして、感謝に堪へざるところなり。（坤帙は近刊の豫定、東方文化學院發行）（芬）

元人雜劇輯逸

趙景深輯

元曲研究者の一つの惱みは、餘りにも資料の乏しいことである。影印せられて容易に手に入る元曲選、古今雜劇三十種元明雜劇等を合せても僅に百三十本にも達せず、太和正音譜著錄の五百三十五本に比べても四分の一に過ぎない。雍熙樂府等に新しい材料を求めても題目もなく、作者の氏名すら殆んど明記せられてゐないため、數倍の努力を必要とする有樣である。此の

點より見れば本書は僅に百三十一頁の小册子であるが、其中に四十二本の雜劇の套數零曲を收錄して、(本文四十一本、補遺に一本を收む)些此方面の學者に寄與してゐる。然して此等四十二本は太和正音譜、北詞廣正譜、雍熙樂府、九宮大成南北詞廣譜並に詞林摘豔より求め、一々其收錄の原書を擧げ、數種の書に收められてゐるものゝ中、異同有るものは其校合の結果を注記してゐる。更に其序文中には此等資料の優劣を論じて居る點等編者の細心さと、初學者に對する老婆心には一層の敬意を表するものである。要するに此の四六型の片々たる册子が學界に貢獻するところも可成大きく、又此種の試みの最初のものとして推奬の辭を惜しまぬものである。(上海北新書局出版、實價五角)(芬)

一九〇

眞宗論攷　第四輯

大谷大學眞宗學研究室

蓮如上人の「我」に就て　釜田　弘文
十住毘婆娑論の初地不退に就ての疑問　村上　專龍
方便の願の一考察　佐々木誠尊
三心釋義に見られる隆寛の教義體系　自見　直
諸師及び善導の定散二善論の考察　野上　觀一
概念展開の一考察　淺野　顯正
○眞宗學專攻生昭和十一年度卒業論文題目並記要
○眞宗學專攻生並眞宗學會々員名簿
○編輯後記